

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

1. 研究課題

「語りえぬもの」を語る行為とその表現に関する学際的研究—禅の言葉と翻訳を中心課題として—

An Interdisciplinary Study on the Behavior and Expression concerning "What We Cannot Speak About" - with a Focus on the Language and Translation of Chan/Zen Buddhism

2. 研究代表者氏名

何 燕生

HE Yansheng

3. 研究期間

2022年4月-2025年3月(1年目)

4. 研究目的

グローバル化やAI化が進む現代社会において、そもそも「言葉」と「翻訳」にはどのような意味があるのか。本研究は、「言葉」と「翻訳」という古くて新しい問題を東アジアにおいて形成された禅仏教をケースとして考察することを目的とする。禅は、「不立文字」と言い、言葉を否定的に捉えようとする一方、語録や公案、灯史など膨大な量の言葉群を残している。矛盾にも見える禅と言葉とのこのような関係を一体どのように捉えたらよいのか。

「語りえぬものについては沈黙せねばならない」という捉え方があるが、禅では、沈黙だけでなく、時には「道え!道え!」と、語ることも求められる。一方、和語、漢語および近世中国の俗語を駆使して必死に語ろうとしたのは日本の禅僧道元だが、道元による禅の日本語化の持つ意味は一体何なのか。さらに、近代では禅が欧米へと「翻訳」され、英語、フランス語などの言語で語られ、異文化との接触によって脱文脈化しつつある。禅のそうした「越境性」について、またどのような分析枠が可能であろうか。本研究は、これまでの研究を踏まえ、今日的な問題をも視野に入れて、禅の「言葉」と「翻訳」の問題をめぐり、国内外の研究者との連携をはかりながら、学際的に研究するというものである。

Against the backdrop of globalization and evolution of AI in modern society, what is the ultimate significance of “words” and “translations”? In this study, the author focuses on the issue of “words” and “translation” and analyzes examples found in Chan/ Zen Buddhism. The core concept of “No attachment to words” (不立文字) in Chan Buddhism is indicative of a negative attitude toward “words”, whereas a voluminous amount of direct quotations from Buddhist monks, koans(公案), and Buddhist lineages are well preserved in documents. To

what extent could we understand and explain this paradox? One opinion highlights the fact that “one must be silence about what cannot be spoken of” (Wovon man nicht sprechen kann, darüber muss man schweigen). It is undoubtedly true that silence is emphasized in Chan/Zen Buddhism, yet occasionally a practitioner is also required to “speak”! The Japanese Zen Master Dogen completed very important Japanese works by incorporating Japanese, Chinese and medieval Chinese vernacular terms into his discourse. What is then the role that Dogen played in the Japaneseization of Zen? Since Chan/Zen has been introduced to the West through translations in modern times, Chan/Zen Buddhism in the English and French contexts is being decontextualized along with its contact with different cultures. What is the effective analytic method for the nature of “cross-boundary” in Chan/Zen? In this present interdisciplinary study, the author works with domestic and foreign scholars to address the issue of “words” and “translation” in Chan/ Zen Buddhism.

5. 本年度の研究実施状況

本年度は基本的に研究計画に沿って、研究活動を実施してきた。具体的には下記のとおりである。すべては人文研大会議室を会場に対面とリモートの両方によるハイブリット形式での開催である。

4月30日(土)、第一回研究会。班員による顔合わせ、自己紹介を行い、本研究班の主旨や年度計画を説明した。国内外から構成される班員42名が参加した。中国語の通訳は柳幹康氏(東京大)、肖琨氏。総合司会は何燕生班長。

6月25日(土)、第二回研究会。午前は『弁道話』の会読、午後は研究報告、四川大学周裕鍇氏、駒澤大学小川隆の二人の班員による近著紹介、発表が行われた。通訳は新潟大の土屋太祐氏、コメンテーターは東北大の齋藤智寛氏。司会は人文研所内班員古勝隆一氏。

10月1日(土)、第三回研究会。午前は『弁道話』の会読。午後は研究報告。東京大の末本文美士氏、アリゾナ大のWu Jiag氏からそれぞれ報告を行った。コメンテーターは早稲田大の和田有希子氏、花園大の小川龍太氏。司会はWittern 副班長、重田みち班員。

12月18日(日)、第四回研究会。午前は『弁道話』の会読、午後は研究報告。関西大の水野友晴氏、多摩美術大の安藤礼二氏による研究報告が行われた。コメンテーターは花園大の飯島孝良氏、東京大の末本文美士氏。司会は関西大の井上克人氏、人文研所内班員の古勝隆一氏。

2023年2月5日(日)、第五回研究会。午前は『弁道話』の会読、午後は研究報告。発表者は京都大の氣多雅子氏、京都大の出口康夫氏。コメンテーターは関西大の井上克人氏、チューリッヒ大のラジ・シュタイネック氏。司会はWittern 副班長。なお、事情により、出口発表は次回へ延期。

当初は3月にも研究会を計画していたが、年度末のため、見送ることにした。

6. 本年度の研究実施内容

2022-04-30 共同研究禅研究班の発足にあたって 共同研究班発足の趣旨および研究計画について 発表者 何燕生 人文研における禅研究の歴史と本プロジェクトの位置づけ 発表者 Christian Wittern 発表者 古勝隆一

2022-06-25 『辨道話』会読 発表者 何燕生

2022-06-25 研究発表 「自著を語る——『石門文字禅校注』と禅語の特徴 発表者 周裕鍇 司会 何燕生 「語りえぬもの」を語る前に——中国禅宗の歴史的特徴」 発表者 小川隆 司会 古勝隆一 コメンテーター Christian Wittern コメンテーター 齋藤智寛

2022-10-01 『辨道話』会読 発表者 何燕生

2022-10-01 研究発表 日本中世禅の再検討—近著『禅の中世—仏教史の再構築を語る』 発表者 末木文美士 東京大学名誉教授 コメンテーター 和田有希子 学道人は誰なのか?—黄檗希運『伝心法要』における「学道人」の用法と意味 発表者 Jiang Wu 司会 Christian Wittern コメンテーター 小川太龍

2022-12-18 『辨道話』会読 発表者 何燕生

2022-12-18 研究発表 鈴木大拙の「大地」と禅との関係性の考察 発表者 水野友晴 司会 井上克人 関西大学名誉教授 コメンテーター 飯島孝良 鈴木大拙の神秘主義・井筒俊彦の神秘主義 発表者 安藤礼二 司会 古勝隆一 コメンテーター 末木文美士 東京大学名誉教授

2023-02-05 『辨道話』会読 発表者 何燕生

2023-02-05 研究発表 西田幾多郎における哲学と禅仏教の関係 発表者 氣多雅子 京都大学名誉教授 司会 Christian Wittern コメンテーター 井上克人 関西大学名誉教授

7. 共同研究会に関連した公表実績

How Zen Became Chan: Pre-modern and Modern Representations of a Transnational East Asian Buddhist Tradition 2022年7月31日 ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）、エール大学（米国）との共催の国際シンポジウムにて、研究班が特別パネルを企画し、班長の何燕生、出口康夫、小川隆、重田みち、柳幹康の班員四名に東京大の一色大悟氏を加えたメンバーで英語もしくは日本語で発表した。

8. 研究班員

所内

Christian Wittern、古勝隆一

学内

上原麻有子(大学院文学研究科)、中村慎之介(京都大学大学院文学研究科)、一色大悟(京都大学人と社会の未来研究院)

学外

9. 共同利用・共同研究の参加状況

※「その他」の区分
受入がある場合
具体的な所属等名称
を記載：例）高校教
員
無所属の場合は機関数0
とカウントし、この欄の
記載不要

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	10		2	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	3	(1)	1	
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	2		2	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	2		1	(1)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	2		2	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名 (必須)	掲載 論文数 (必須)	掲載 年月日 (必須)	論文名 (必須)	発表者名 (必須)
1	『東アジア仏教学論集』 第 11 号、東洋大学東洋 学術研究所発行	1	R5.3	道德教育としての「禅と 武士道」という言説の生 成とその背景—新渡戸稲 造・井上哲次郎から鈴木 大拙まで—	何燕生
2	Studies in Chinese Religions 8.4 (2022). Taylor & Francis Group (Routledge)	1	R5.3	Chan Studies as Chinese Studies: Matsumoto Bunzaburo's Study of the History of Chinese Chan Buddhism	何燕生
3	『宗教研究』第 96 巻別 冊子第 81 回学術大会特 集号、日本宗教学会	1	R5.3	中国学としての中国禅宗 史研究—京都大学を事例 として—	何燕生
4	『禪流河東復河西:禪宗 跨地域與跨文化傳播的跨 學科考察』407-466 頁、 陳金華主編、《華林佛學研	1	R4.12	作為中国学的禪研究—京 都大学中国禅宗史研究管 窺	何燕生

	究書系》V。新加坡シンガポール：World Scholastic				
5	《武昌仏学院創立 100 周年記念式典暨仏教中国化国際学術研究会論文集》、201-239 頁。武昌佛學院	1	R4.12	My Friend Taixu-太虚と駐日ドイツ人仏教研究者ブルーノ・ベッツォルト及び駐日ドイツ大使ヴィルヘルム・ハインリヒ・ゾルフとの交流	何燕生
6	“Thus Have I Heard”: Patterns and Logics in Buddhist Narrative Literature p.1-23. UBC Department of Asian Studies ONLINE, in collaboration with Peking University. オンライン論文回覧形式。	1	R4.11	Linji 臨濟 (?-867), Ryōkan 良寛 (1758-1831) and Ikkyū 一休 (1394-1481) in the Chan Narratives by Yanagida Seisan	何燕生
7	『第二回国際天台学:天台と東アジア世界国際学術研究会論文集』、437-455 頁。北京大学仏教研究センター、浙江工商大学東亜研究院	1	R4.10	日僧道元与『法華経』	何燕生
8	How Zen Became Chan: Pre-modern and Modern Representations of a Transnational East Asian Buddhist Tradition	1	R4.7	Chan Studies as Chinese Studies: A Study of Chinese Chan History at Kyoto University	何燕生
9	『天童と東アジア世界国際学術研究会』219-233 頁。浙江工商大学東亜研究院。	1	R4.7	論道元と如浄的修証思想異同	何燕生

10	『東アジアにおける哲学の生成と発展: 間文化の視点から』(廖欽彬・伊東貴之・河合 一樹・山村奨著編集)、法政大学出版局	1	R4	九鬼周造 偶然-必然の戯れとしての芸術と実存	上原麻有子
11	『哲学研究』	2	R4.7, R5.2	企投する思索 (上)(下)	氣多雅子
12	『史林』	1	R5.3	高麗前期における道誂への追贈について	中村慎之介
13	『中国思想史研究』	1	R5.3	大覚国師義天の焼身供養一孝を目的とした捨身一	中村慎之介
14	『東洋学報』	1	R4.12	高麗における王室出身華嚴宗僧侶への国師号追贈の慣例成立について	中村慎之介
15	『東北大学附属図書館調査研究室年報』10	1	R5.3	東北大学文学部百周年記念事業・デジタルミュージアム“歴史を映す名品”	柳原敏明, 高橋章則, 大木一夫, 仁平政人, 堀裕, 鹿又喜隆, 藤澤敦, 西村直子, 矢田尚子, 齋藤智寛, 長岡龍作, 杉本欣久, 阿部恒之
16	『日本中国学会便り』42	1	R4.12	「書評シンポジウム」観察記	齋藤智寛
17	『アジア遊学 277 宋代とは何か 最前線の研究が描き出す新たな歴史像』	1	R4.11	北宋仏教の気風	齋藤智寛

18	La dimensione mondana e il distacco: Zen e le altre tradizioni religiose a confronto.	1	R4	「 Il significato della pratica tra le montagne di Dōgen: il rapporto tra il mondo secolare e le montagn(道元における山林修行の意義—世俗世界と山との関係)」	Mitsuko Yorizumi
19	Journal of Integrated Creative Studies	1	R4	仏教の自然の捉え方とその表現——道元を視座として」	頼住光子
20	井上治・森田都紀編『伝統文化 研究編』	1	R4.7	分担執筆「室町時代の芸道書に見る芸の場所柄・時節・機会——諸ジャンルの心得を比較する」	重田みち
21	『東方學報』 97	1		「『文史通義』 内篇五譯注」(訳注)	竹本規人・古勝隆一・渡邊大・内山直樹・藤井律之・田尻健太・重田みち・永田知之・福谷彬・新田元規・山口智弘
22	『駒澤大学禅研究所年報』	1	R4.12	大慧宗杲の静中の工夫について	石井修道
23	『駒澤大学禅研究所年報』	1	R4.12	『大慧普覚禅師宗門武庫』訳注稿(2)	小川隆 張超 ディデイエ・ダヴァン
24	『春秋社』	1	R4.4	禅僧たちの生涯—唐代の禅	小川隆

25	Religions 14(1), Special Issue "The Intersection of the Supernatural, Wondrous, and Identity in World Hindu Traditions"	1	R4.12	Smuggled Hinduism — From Dōgen's Viewpoint	早 川 敦 (Atsushi Hayakawa)
26	Religions	1	5/20/2022	Translation and Interaction: A New Examination of the Controversy over the Translation and Authenticity of the Śūramgama-sūtra	Jinhua Jia
27	『歷史文獻與傳統文化』	1	1/12/2022	唐五代類書考	賈晉華
28	《中国哲学史》2022 年第 3 期	1	5/1/2022	从经史之学到道学：再论北宋思想史上的辟佛说	龚隼
29	Co-edited by Jinhua Chen & Wang Song. Singapore: World Scholastic Publishers	1	R4.8	Chinese Transformation of Buddhism & Crossborder Transmission of Buddhism: Pan-Asian Spread of Tiantai/Ch'önt'ae/Tendai Texts, Ideas and Practices and Its Position in East Asian Society	王颂
30	《中国哲学史》2022 年第 1 期, 第 89-97 页	1	R4	五四学人论佛教与中国文化传统	王颂
31	《五台山研究》总第 152 期 2022 年第 3 期, 第 3-8 页	1	R4	东来何意：日本近代学者五台山参访探秘	王颂

32	《哲学研究》2022 年第 12 期, 第 45-53 页	1	R4	名言与心识:《齐物论释》对佛教语言哲学的阐发	王颂
33	Take the Vinaya as Your Master: Monastic Discipline and Practices in Modern Chinese Buddhism, Ester Bianchi and Daniela Campo, eds.	1	R5.3	Changing attitudes to the Precepts in Modern Taiwan: The Debate between Brahmā's Net Precepts and Yogācāra Precepts	Pei-ying LIN
34	The Formation of Regional Religious Systems in Greater China. 1-32. Ed. By Jiang Wu. Spatial Humanities Series,Routledge	1	R4.12	“Exploring Regional Religious Systems (RRS): Theoretical and Methodological Considerations.”	Jiang Wu
35	Creating the World of Chan/Son/Zen: Chinese Chan Buddhism and its spread throughout East Asia, edited by Albert Welter, et. al. 69-94. Albany: SUNY Press.	1	R4.12	“A Greater Vehicle to the Other Shore: Chinese Chan Buddhism and the Sino-Japanese Trade in the Seventeenth Century,”	Jiang Wu

本年度発表された高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された論文

	雑誌名（必須）	インパクトファクター（数値）（必須）	掲載論文数（必須）	掲載年月日（必須）	論文名（必須）	発表者名（必須）
1	Religions	0.563		5/20/2022	Translation and Interaction: A New Examination of the Controversy over the Translation and Authenticity of the Śūramgama-sūtra	Jinhua Jia

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
1	《日本思想史》	[日]末木文美士 著, 王頌、杜敬婷译	R4.11	北京大学出版社

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

	人数
博士学位を取得した学生の数	0

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

14. 次年度の研究実施計画

今年度と同様、来年度も研究会を五回計画し、人文研大会議室を会場に、対面とリモートによるハイブリット形式での開催を考えている。内容も今年度と同様、午前は『弁道話』の会読、午後は研究報告が行われる。具体的には下記のとおりである。

4月29日(土)第1回研究会。午前の部と午後の部に分けて実施する。班員による研究報告を行う予定。

6月25日(日)第2回研究会。午前の部と午後の部に分けて実施する。班員による研究報告を行う予定。

10月28日(土)第3回研究会。午前の部と午後の部に分けて実施する。班員による研究報告を行う予定。予算の執行状況を見て、小規模の国際シンポジウムを計画中。新著報告会も企画中。

12月23日(土)第4回研究会。午前の部と午後の部に分けて実施する。班員による研究報告を行う予定。

2024年2月3日(土)、第5回研究会。午前の部と午後の部に分けて実施する。班員による研究報告を行う予定。

15. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費			
	一般旅費	5	30	800000
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費			
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の）				100000
消耗品等経費				100000
その他				
合計				1000000

16. 研究成果公表計画および今後の展開等

2年度目にあたり、引き続き国内外の学会や研究会において、それぞれの班員による個別の研究発表を行うとともに、これまでの『弁道話』会読の成果を纏め、できれば『人文学報』もしくは『東方学報』に投稿し、公表したいと考えている。

また、2023年9月に東京外国語大学で開催される予定の日本宗教学会年度学術大会で研究班によるパネル発表を企画することも計画中である。

これらの企画により、研究班の成果を国内外の学界に公開し、共同研究ならではのアピールはもちろん、禅をツールとした学術的文化的交流に寄与することになるのであろう。